

実習の事前事後指導における学生の学びあい

鈴木 方子・大岩 みちの*

Students Learning from Each Other in Guidance for Childcare Practice

Masako SUZUKI and Michino OIWA

はじめに

保育実習の事前事後指導は厚生労働省の「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」の中に教科目の教授内容としてまとめられている。それによれば実習指導のねらいは「保育実習を円滑に進めていくための知識・技術を習得し、学習内容・課題を明確化するとともに、実習体験を深化させる」¹⁾と述べられている。「実習体験を深化させる」とはいかなる指導を指すのであろうか。

これまでの取組みの報告における「短期間の実習でも、学生は保育者としてのマナー（挨拶、身なり、態度、言葉遣い）を自覚し、子どもの姿や保育者としての子どもへのかかわり方を考えるきっかけを得ている」²⁾という結果は、実習という経験が学生の学びの深さを導くものとなっていることを示している。また、「紙面上の反省以外に実習園での口頭による反省会からの学びの深さにも意味を見出していることから、授業時間内の口頭による反省会からの学びも見逃せない」³⁾、「実習の事後指導における反省の促し方が、保育者になるという意識を明確にし、意欲をかきたてることや学びを継続する方法を導くことが見えてきた」³⁾という結果報告は、実習後の学生間の話し合いがその後に及ぼす効果や実習の事後指導の反省方法如何によっては、その後の学生の育ちに大きな差を生むことを導き出している。そして、「自分が学んだことを自分の頭の中にだけとどめておくのではなく、多くの人とそれを交流し合い確かめ合っていくということも大切」⁴⁾と言われるように、学ぶことが人間社会に生きる互いの幸せにつながるものでなければならない。さらに、「「教え」と「学び」は表裏一体であり、相互構成的」⁵⁾、すなわち、「「学ぶ」ということは、何かが「自分にかかわること」であると同時に、「自分ごとではすまされないこと」として、つまり他人に伝えないではいられないこと、他人とともに味わい、認め合いたいこととして、ものごとを「知る」こと」⁵⁾とされ、「学びあう」ことを構築することが学ぶ場をより有効にするものとして浮かび上がってくる。

これまでも保育実習の事前事後指導で「学びあう」ことをねらいとして学年を越えて実施されているものには、名古屋女子大学では合同反省会や指導案の添削などがある。反省会は保育所実習を終えた2年生が、各グループで話しあった内容を1年生に向けて報告する会である。指導案の添削は、保育実習の事前指導の時間を利用して、保育所実習を経験した3年生が、1

* 岡崎女子短期大学

年生の立てた指導案を添削するというものである。しかしそれらは保育所実習を経験した上級生からまだ経験をしていない下級生への一方的なもので、知識の伝達という側面が強く、1年生にとっては学ぶことがあると思われるが、お互いに学びあうという視点でとらえることには無理があった。

これらをふまえ、学生が自分自身の実習を省察し、さらに次の実習や保育者になるにあたっての課題を見出すことを目標に、「学年を超えた学生同士の学びあい」に焦点を当て、以下のように調査研究を進めることとした。

研究の方法

以下の順序に従って2、3年生が調査用紙に記入したものを考察した。なお図1に調査方法の手順を示し、それぞれの調査用紙の質問項目も合わせて記した。

対象：名古屋女子大学文学部児童教育学科幼児保育学専攻2年87名、3年68名

方法：調査用紙（①，①a，②，③）に記入したものを分析する。

調査用紙は無記名としたが、調査用紙①aが本人に返却される必要があるため
予め用紙に番号を振り、本人に返却できるよう配慮した。

また調査用紙①の記入者は76名であるが、それに対して回答者は59名であったので
17名が複数回答をした。

時期：調査は2005年11月中旬に実施した。2年生は同年6月、3年生は同年9月にそれぞれ保育所実習を終えている。3年生は自分の経験を伝えたいという意欲をもち、2年生は来年度の保育所実習に向けての課題を見つける前段階であるので、この時期の調査が適当であると判断した。

調査用紙①

保育所実習で困ったこと、悩んだことを2年生が記述

対象：2年生 出席者76名中76名回答 調査月日 2005.11.10

調査用紙①a

2年生が記述した用紙①に対して1年前に同じ実習経験をした3年生が意見を記述

対象：3年生 出席者59名中59名回答 調査月日 2005.11.14

調査用紙②

用紙①a記述後に3年生が学んだこと・感想を記述

対象：3年生 出席者59名中59名回答 調査月日 2005.11.14

調査用紙③

2年生が用紙①aを読んで学んだこと・感想を記述

対象：2年生 出席者76名中76名回答 調査月日 2005.11.17

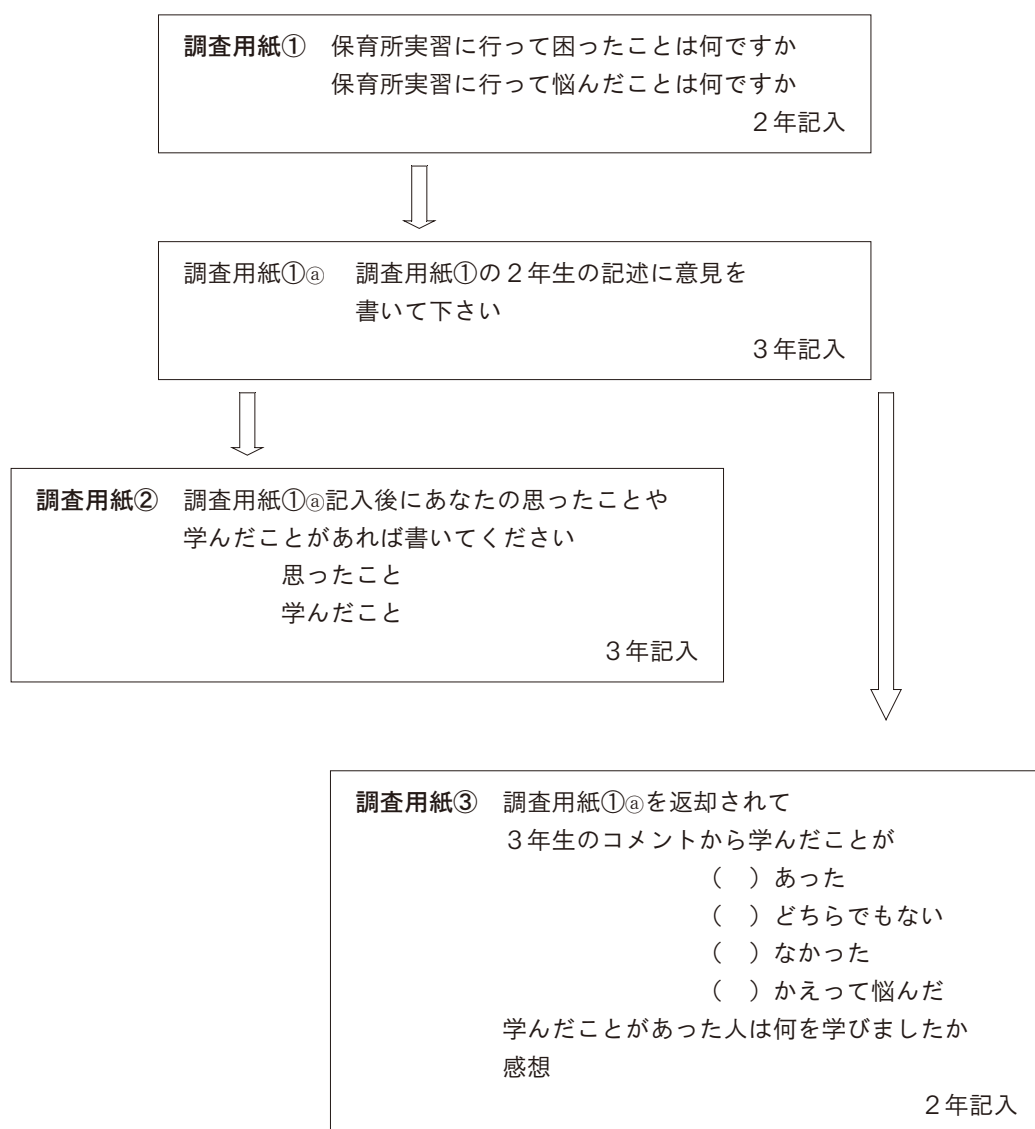


図1 調査方法

結果と考察

以上の調査の結果を調査用紙の番号順にまとめ考察した。

(1)調査用紙①

調査用紙①の実習で困ったこと、悩んだことについては学生の記述を以下のカテゴリーに分類し、実数を示した。(表1、2参照)

表1 2年生が保育所実習で困ったこと（調査用紙①） N=288

子どもへの対応	実数	実習内容	実数
a 子どもへの援助の仕方 どこまで注意していいのか いうことを聞いてくれない 給食を食べてくれない どこまで援助していいのか	41	g 部分実習の計画、内容 導入や展開の仕方 計画・内容をどうしたらいいのかわからない 子どもの行動を予測できなかった 何をしたいのかわからない	38
b 限られた子とだけ関わってしまうこと 遊んでといわれてずっとそばにいる 甘えてくる おんぶやだっこをせがまれる 一斉に話かけられる	30	h 教材の準備 手遊びを知らない 主活動のレパートリーがない ピアノがうまくひけない 子どもと私の手遊びが違った 突然何かしてと言われ困った	28
c 言葉かけの仕方 子どもが自分から進んで行動するための言葉かけ 次の活動へ促すときの言葉かけ	24	i 健康管理 体力がない かぜをひいた 声が出なくなった 給食の量が多い 睡眠不足だった	27
d けんかやけがへの対応	14	j 日誌や指導案の書き方 日誌をどこまで細かく書いたらいいのか 書き方がわからない	24
e 乳児、障害児への対応 障害のことを先生に聞けなかった 乳児の着替えや食事をどこまで手伝えればいいのか 乳児が泣いているときどうすればいいのか	13	k 先生との関わり方 質問できなかった、質問する時間がない 先生に話しかけられなかった どの先生の言われることをきけばいいのかわからない 先生の目を気にしてしまう 先生の関わり方だと子どもが静かになる	24
f 子どもの発達、その他 一人一人の発達がわからない 全体が見られない はみがきのしかたがわからない 異年齢保育での子どもへの対応	10	l 何をしたいのかが不明 指示されたことが終わった後何をすればいいのか することがなくなった 昼寝のとき何をしたらいいのか 先生の仕事をしたいのか	15

2年生が困ったことは、子どもへの対応と実習内容の大きく二点に分けることができる。これは保育実習のねらいを考えると当然のことであると言えよう。本学2年生の保育所実習では主たる目標を乳幼児の理解、保育所での一日の生活の流れ、保育士の役割と仕事内容、保育所の役割と機能を学ぶことに置いている。⁶⁾

子どもへの対応では、援助の仕方、言葉がけ、乳幼児の発達等、大学の講義で理論は学んだが実際に保育の場で乳幼児と関わってみて具体的に困ったことが記述されている。特にa, b, c, dの項目は子どもへの援助方法についてである。どこまで注意していいのか、遊んでといわれた子とだけしか遊べなかった、けんかの仲裁ができなかった、どう言葉かけをすればいいのかわからなかった等、自分から関わってうまくいかなかったというより、どう対処すればいいのかわからないという例がほとんどである。

また実習内容においては、部分実習、教材の準備、健康管理、日誌の書き方等は、事前指導で指導を受けているのだが、思ったようにはいかなかった部分である。「健康管理をしなさいと言われていたのに、実際に実習に行ってみてそのことがよくわかった」という意見に象徴されるように、これらについては、問題点もはっきりして次への課題も設定しやすい。

それ以外に、表1-1の中で「何をしてよいのかが不明」という記述が見られた。具体的には、指示されたことが終わった後何をすればいいのか、実習時間内にする事がない、何をすればいいのかわからない等、76名中15名がこう答えている。この調査を実施する以前は、何をすればいいのかわからない場合はまず自分でできることはないか考え、さらに実習園の先生に尋ねるようという指導を行ってきた。しかし表1-kの先生との関わり方で、先生に質問できなかった、話しかけられない、という学生が24名いることがわかった。すなわち何をすればいいのかわからない、また先生に聞くこともできない学生が調査に回答した学生のおよそ2～3割を占めているのである。このような学生への指導法を考えていくことも重要な課題である。

表2 2年生が悩んだこと（調査用紙①）N=26

2年生が悩んだこと		実 数
実習をふりかえって	大変だった、長かった、緊張した 先生にどう見られているか気になった	8
自分をふりかえって	自分の性格を改善したほうがいいのではと思う	4
将来についての不安	本当に保育士になれるのか 自分は保育士に向いているのだろうか	10
その他	学校で習ったことをすっかり忘れていた もっと真剣に学ばなくてはいけない 母親の代わりにはなれない 先生と実習生との違い	4

また表2の2年生が実習で悩んだことについては、回答数は少なかったが、実習は緊張した、大変だった、先生にどう見られているか気になった等、実習を振り返って感じたことが記述されている。また、自分を振り返っての記述、たとえば自分の性格、保育者になることへの不安等、将来について考える記述が見られた。保育者になることを目標に進学した大学での初めての实習を通して自分自身への洞察が生まれたことは、今後の学びへとつながる視点であると思

われる。

(2)調査用紙②

次にこの2年生の記述した調査用紙①を読んで3年生が意見を記述した。それが調査用紙①aであり、調査用紙①aを記述後に3年生の学んだことと感想が調査用紙②である。

なお今回は学生の学びあいに焦点を絞ったので調査用紙①aの結果と考察は省略した。これについては別の機会に報告する予定である。

表3 3年生が記述を通して学んだこと（調査用紙②） N=59

3年生が学んだこと		実数
自分の実習を振り返ることができた	自分の実習をふりかえることができた 先生の気持ちがよくわかった 自分ができたこととできなかったことを自覚した 文章に書くことで実習を見直すことができた	25
この経験が次の実習に役立つ	今後の課題が見えてきた ふりかえて反省することが次につながっていく 初心にかえた 積極的に聞くことが大切である	11
2年生の考えに共感できた	他人の悩みを自分の悩みとして考えることができた 役に立ててうれしい	9
実習は何回も経験することが大切	今までの実習経験は大きいものだったと実感した	7
悩むことは大切で意味がある	今まで考えたことがないことを考える機会となった 悩みをもつことはよいことだ	4
その他	人の悩みはそれぞれである 物事を多方面から見るのが大切である 文章にどう書くと伝わるのかを学んだ	3

3年生は2年生に応えることで自分の実習について振り返り、次に生かそうとしている。

たとえば自分の実習を振り返ることができたという回答が25あり、自分の次の実習に役に立つという回答と合わせると半数以上が自分の学びと考えている。先生の気持ちがわかったという記述からは、実習中にはわからなかったことが改めて後輩の悩みに向き合ったときにそのときの先生の気持ちを思いやることができたことを示している。

また2年生の考えに共感できたという例では、経験者として指導するという構えではなく、共に考えるという姿勢を読み取ることができる。役に立ててうれしいという言葉は、人の悩みに応えることによって、自分の存在価値を見出すことができ、そのことが共感することにつながったのではないか。さらに表4には同じ調査用紙②の感想をまとめた。

表4 3年生の感想（調査用紙②）

感 想	実 数
同じように悩んでいる、悩んでいるのは自分だけではない	39
私も少しは成長したかなと思う	16
どう答えればいいのか悩んだ	3
実習に対する気持ちはさまざまだ	3
自分で書いたことを自分も実行できるとよい	1
情報交換はいいことだ	1
やはり先生には聞きづらい	1
実際に行動するのはむづかしい	1
実習園の先生にもっと相談してもいい	3
失敗を恐れず積極的に取り組んでほしい	1
実習生という立場に感謝するべきである	1
2年生で保育者に向いているかどうか悩むのは早い	1

3年生の感想では、悩んでいるのは自分だけではないという回答が半数以上を占めている。2年生の悩みに意見することによって自らが励まされ、同時に悩んでいるのは自分だけではないことがわかって安心している。また、自分が1年前に比べて成長したことに気づいたという記述が多かった。これ以外に保育所の先生にもっと相談すべきである、2年生の段階で保育者に向いているかどうか悩むのは早い、実習生という立場に感謝すべきであるという意見も見られた。また先生には聞きづらい、実際に行動することはむづかしい等、2年生の悩みに共感する意見もあった。

(3)調査用紙③

次に調査用紙①aを返却された2年生が、3年生の記述を読んで学んだことがあったかどうかを聞いたものが調査用紙③である。これは学ぶことがあった、どちらでもない、学ぶことはなかったの3項目それぞれ該当するものに○をつける調査であった。

表5 3年生の記述から学ぶことがあったか N=76

		実 数
(1)学ぶことがあった		68
(2)どちらでもない	3年生のコメントは全てやったことだったので、なるほど と思えることがなかった 2 そんな簡単には解決できない 今後どうしたらいいかという解決にはつながらない 実習園の先生に言われたことに似ていた 頭では理解しているが実際にはできない 2	7
(3)学ぶことはなかった		0
(4)無回答	わかっているけど行動に移せない	1

表5からわかるように、回答者のおよそ9割は学ぶことがあったと回答し、どちらでもないが7名、無回答が1名であった。

7名がどちらでもないと回答しているが、その内容は表5の（2）にまとめた。やったことだったのでなるほどと思えない、簡単には解決できない、実際には無理、等3年生の意見に否定的である。このような意見を持つ学生に対する指導方法を探ることが今後の課題である。次に学ぶことがあったとの回答の具体例は表6に示してある。

表6 2年生が学んだこと（調査用紙③）N=97

	2年生が学んだこと	実数
子どもへの援助の仕方	少し距離をおいてさまざまな角度から見る 言葉だけでなく表情や動作で促す 子どもと接するなかで学ぶ 子どもの気持ちを受け入れる	37
失敗を恐れず、積極的に行動すること	失敗を繰り返すことで成長する 臨機応変に対応することが大切	18
先生との関わり方	わからないことは聞く 先生に話す時間は自分で見つけたいといけない 先生の動きをしっかりと見る 感謝の気持ちを忘れない	13
健康管理		8
教材の準備	絵本の読み方 手遊びの覚え方	5
日誌や指導案の書き方	繰り返して書くことで身につく 字をきれいに書く	5
今後の課題、心がまえ		5
事前準備の重要性	保育指針を読む	4
友だちとの人間関係		2

2年生は子どもへの対応と実習生としての態度、先生への対応について学んだ学生が多かった。これは調査用紙①に書いた困ったことに対する3年生の記述から学ぶことがあったという結果である。2年生は自分から関わってうまくいかなかったというより、どう対処すればいいのかわからないという例を困ったこととして挙げていた。たとえばいうことをきいてくれない子に対して、少し距離をおいて見る、言葉だけでなく表情や動作で促す等、具体的な方法を見出している。日誌の書き方や健康管理でも、具体的な対処法を3年生の助言から得ていることが読み取れる。また、同時期に実習をしている友人の存在が大切であることに気付いたという意見があった。実習中に情報交換をしていたけれど、そのことに励まされていたことに改めて気がついたのである。

最後に2年生の感想を表7にまとめた。

表 7 2 年生の感想（調査用紙③） N = 68

2 年生の感想	実 数
悩んでいたのは自分だけではない、安心した	16
うれしかった、がんばる気になった	17
自分のことしか考えていなかったことに気がついた	1
参考になった	15
もっと聞きたい	5
学んだことを来年に生かしたい	3
自分の将来について考えてみる	2
こんな 3 年生になりたい、先輩ってすごい	6
自分も来年できるだろうか	3

感想は 3 年生と同様に皆が同じように悩んでいる、共感しあうことができて嬉しいという声が半数であった。ためになった、がんばる気になったという意見と共に、来年は 1 年生にも伝えたいという意見もあった。

2, 3 年生に共通して、悩んでいるのは自分だけではないという、互いに同じ思いをしていることに親近感を覚える記述があった。2 年生は 3 年生に励まされ、3 年生は再度自分自身の実習を振り返ることで新たな発見をしていることもわかった。この調査をきっかけに、今後、学生同士が学年を越えたつながりをもつようになることを願う。

2 年生のなかに「保育者として相手を受け入れる姿勢を 3 年生から学んだ」という回答があった。まさに、「学びあい」が現実のものになりつつあることを実感した。

結論

今回の調査を通して「学びあい」という視点の重要性を再認識することができた。

「学びあい」は相手の様々な学びに気づくことと、学びを困難にしている状況を理解できるか否かが重要な役割を果たすということに辿り着いた。表 3 で 3 年生が 2 年生に対して「悩むことは大切で意味がある」とコメントをしていることは、自分自身が悩んで追い込まれた経験から、それを乗り越えようとする後輩の姿に「共感」を覚え、そこから学ぶことがあることに気づいているからに他ならない。そして、同一条件、同一経験をしているという仲間意識の有無と、相手の意見や考えを受け入れることができるかできないかということが、「共感」できる、できないという状況を生むことにつながっている。相手に伝えずにはいられず、共に味わい、認めあいたいと思う「学びあい」には、ある程度の条件も必要になろう。しかし、いずれは学生時代を終え、様々な人と交わり、関わりあう近い将来に向け、人間関係の調整力を身につけておかなければならない。そのために、今後、この事前事後指導の一部としての「学びあい」には、学年を超えることのほか学校の枠を超えたやり取りをする機会も必要となるはずである。また、サークル活動やボランティア活動等も同様な学びの場と成り得ることを示唆している。

そして、学生同士の学びあいだけでなく、教員として学生に何を指導するかについても有用な示唆を得ることができた。表 1 からは「何をしていいかわからない」「先生に聞くことができない」学生にどう対応したらいいのかという課題が浮かび上がってきた。

さらに表5の2で3年生から学ぶことはあったかという質問にどちらでもないと答えた学生にどう対応していけばいいのだろうか。今後学ぶことはなかったと記述した学生がどのような学びの場を構築していくのか、このような意見を持つ学生に対する指導法を探ることも今後の課題である。

常に自分自身の実習や保育を振り返ることを怠らず、新たな課題を見出して保育に取り組み続ける姿勢は、教員にとっても欠かせないことであり、「学び」と「教え」が表裏一体、相互構成的である所以に違いない。その繰り返しが実習体験の深化につながっていくのではないかと考える。

参考文献

- 1) 「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」厚生労働省雇用均等・児童家庭局長 雇児発第1209001号 (2003.12.9)
- 2) 大岩みちの・吉田龍宏：実習の事前指導の充実をめざして 第57回保育学会発表論文p544～545 (2004)
- 3) 大岩みちの・吉田龍宏：実習の事前指導の充実をめざして その2 第58回保育学会発表論文 p154～155 (2005)
- 4) 森上史朗・吉村真理子・後藤節美編：保育内容「人間関係」piiミネルヴァ書房 (2001)
- 5) 佐伯胖・藤田英典・佐藤学編：学びあう共同体 p151 東京大学出版会 (2004)
- 6) 川上輝昭・鈴木方子：保育実習の手引き p1 (2005)